

松下幸之助氏の和歌山時代

出生から紀ノ川の別れまで

PHP総合研究所

研究本部第一研究部主任研究員

佐藤悌二郎

1. はじめに

明治27年(1894)11月27日、松下幸之助氏は、和歌山県海草郡和佐村字千旦(せんだん)ノ木〔現・和歌山市禰宜(ねぎ)〕に生まれた。和歌山市の中心部からJR和歌山線に沿って東へ7、8キロメートルほど紀ノ川をさかのぼった、紀ノ川の左岸(南岸)に連なる農村地帯である。

父の名は政楠〔『松下電器五十年の略史』(1968)では「正楠」とあるが、正しくは「政楠」〕、母の名はとく枝という。幸之助氏は、男3人、女5人の8人兄弟の末っ子であった。

その後、松下家は、明治32年(1899)幸之助氏が満4歳のころに、父の政楠が米相場に失敗したため、父祖伝来の土地と家を人手に渡し、和歌山市内に移り住む。そこで幸之助氏は、明治37年(1904)11月23日に、小学校を4年で中途退学して単身大阪へ奉公に出るまでのおよそ5年間を過ごした。

筆者はこれまで、松下幸之助氏の経営観や人生観、人間観などが、どのようにして形成されてきたのかを探ってきているが、この実社会に出るまでの和歌山での9年間の幼少年時代の生活なり出来事も、幸之助氏の考え方や性格になんらかの影響を与えていると考えられる。また、この和歌山時代のことについては、出生から昭和8年(1933)までの半生を綴った幸之助氏の自叙伝『私の行き方考え方』ほかで語られているものの、情報量が少なく、不明な部分が多い。しかもその記述や発言には、いろいろな食い違い、矛盾する点が多くみられる。

そこで、それらの和歌山時代についての記述や発言を洗い出し、幸之助氏の当時の足取りを丹念に一つひとつ辿りながら、事実関係を可能なかぎり明らかにするとともに、幸之助氏の考え方の形成に与ったと思われる事柄について考察、整理しようというのが本稿のねらいである。

そのために、本稿では、まず松下幸之助氏をとりまく当時の家庭環境がどのようなものであったかを概観し、つぎに、当時の幸之助氏の生活や体験を、事実関係の解明を図りながら辿り、最後に、それらの家庭環境や生活、体験が、その後の幸之助氏の性格や考え方、とくに経営哲学に及ぼしたと思われる点について考察を進めてみたい。

2. 松下家と幸之助氏の父母兄弟

生誕の地と生家

松下幸之助氏が生まれ、4歳までを過ごした海草郡(注1)和佐村の「和佐」は、土地の郷土史家によれば、湾曲の意であり、和佐の地は太古海で、このあたりは大きな入り海すなわち湾であった。これによりこの名がおこったのであろうという(注2)。この地は明治4年(1871)の廃藩置県により和佐組と称し、明治21年(1888)の「市制町村制」の制定およびその実施に向けて断行された町村合併によって、明治22年(1889)4月に和佐村となった。

また「千旦ノ木」という地名は、紀州藩祖、南龍公徳川頼宣(1602~1671)が、この地を訪れたときに、

梅檀の大木があったので、この一円をセンダンと名づけ、それが変化して千旦になったのであろうといわれる。なお、今日、「千旦」は、センダンではなく、センダと読まれ、幸之助氏の生家のあった場所から歩いて5分ほどのところに、JR和歌山線の「千旦（センダ）」という駅がある。

もっとも、この千旦は俗称であって正式な地名ではない。正式には禰宜という。この禰宜の地名のいわれは、その東に位置する高積（たかつみ）山の山上にある高積神社の禰宜が住居していたためにつけられたのであろうとされる。但し、いつから「禰宜」となったのかは定かではない。この地区は、昭和31年（1956）9月1日に和歌山市に合併され、松下家のあったところは、現住所でいえば、和歌山市禰宜1216となる。幸之助氏によれば、この一円はおいしい米がとれ、少し離れた山手にはミカン畑が多く、幸之助氏の子どものころには養蚕も盛んであったという。また、千旦は60戸ほどの小さな集落だが、どの農家も耕作面積が比較的広く、しかも働き者と評判をとり、暮らし向きはいいほうだったということである（注3）。

松下家は小地主で、千旦ノ木では旧家に属した。享保年代（1716～1736）から書き綴られた過去帳があり、そこには40有余の戒名が記載されてあるという（注4）。さきの郷土史家によれば、松下家は幸之助氏の祖父（政楠の父）房右衛門〔明治15年（1882）8月5日没、享年81歳（注5）〕のころが最も盛んな時代で、千旦から西和佐村までいくのに他家の土を踏まずにいける資産家であった。しかも、松下家の田地は上々田ばかりで、今でも（昭和40年ころの話）「松下地」といって千旦の人々のいちばん欲しがるといっている（注6）。

生家の屋敷内には、樹齢700年とも800年ともいわれる松の木がそびえ、近在では、「千旦の松」と呼ばれ、ちょっとした目印になっていた。しかし、残念ながらこの松は、昭和41年（1966）の夏に、落雷によって3分の1を焼失し（注7）、さらに昭和45年（1970）11月21日、隣家の火災によって根元の部分を5メートルほど残すのみとなった。また、松下家の藁葺きの家は、戦後取り壊され、現在は民家となっている。「松下」姓は、田舎にしては珍しく千旦には一軒のみで、この姓

は、この松から来ていると思われる幸之助氏はいつている。

つぎに、幸之助氏の父母兄弟の年譜を以下に示そう。年齢は満年齢、（幸 歳）は幸之助氏の年を指す。

安政2年（1855）	2月28日、父政楠生まれる
安政3年（1856）	1月9日、母とく枝生まれる
明治7年（1874）	9月28日、長女イワ生まれる
明治10年（1877）	9月2日、長男伊三郎生まれる
明治13年（1880）	9月13日、次女房枝生まれる
明治15年（1882）	12月21日、次男八郎生まれる
明治18年（1885）	4月19日、三女チヨ生まれる
明治21年（1888）	6月12日、四女ハナ生まれる
明治24年（1891）	2月20日、五女あい生まれる
明治27年（1894）（幸0歳）	11月27日、三男幸之助生まれる（父政楠39歳、母とく枝38歳）
明治32年（1899）（幸4歳）	このころ、父政楠、米相場に失敗し、松下家は和歌山市に移り、知人の肝煎りで下駄商を本町1丁目で始める。長男伊三郎、中学を4年で中退し店を手伝う（1、2年ほどで閉店）
明治33年（1900）（幸5歳）	10月4日、次男八郎病没（17歳）
明治34年（1901）（幸6歳）	4月、幸之助、和歌山市雄（おの）尋常小学校〔現・雄湊（おのみなと）小学校〕に入学
	（幸6歳）4月17日、次女房枝病没

(20歳)

(幸6歳)8月22日、長男伊三郎病没(23歳)

明治35年(1902)(幸7歳)7月、父政楠、単身大阪に移住、私立大阪盲啞院に勤務

明治37年(1904)(幸9歳)11月23日、幸之助、小学校を4年で中途退学、南海鉄道(現・南海電気鉄道)紀ノ川駅から母親に見送られ単身大阪へ。宮田火鉢店(大阪市南区八幡筋)に奉公

明治39年(1906)(幸11歳)このころ、母とく枝と姉、和歌山から大阪に移り住む(注8)

(幸11歳)4月17日、四女ハナ没(17歳)

(幸11歳)5月28日、三女チヨ没(21歳)

(幸11歳)9月29日、父政楠病没(51歳)

(幸11歳)×月、父政楠没後、母とく枝(50歳)、五女あい(15歳)和歌山へ帰る

大正2年(1913)(幸18歳)8月14日、母とく枝病没(57歳)

大正8年(1919)(幸24歳)×月×日、五女あい(有本昇三に嫁ぎ有本姓)没(28歳)

大正10年(1921)(幸26歳)×月×日、長女イワ(亀山長之助に嫁ぎ亀山姓)没(48歳)

以上が、自叙伝『私の行き方考え方』ほか、その後の調べで分かっている幸之助氏および父母兄弟の年譜である。

父政楠のこと

年譜にあるように、父政楠は、安政2年(1855)2

月28日に生まれている。幸之助氏が生まれたころ、政楠は百姓仕事は小作人にやらせて、自分は村会に出たり、役場の仕事に携わったりしていた。『道は明日に』

(1974)ほかで、明治23年(1890)に自治制が敷かれたとき、政楠は27歳の若さで第一期の村会議員に選ばれたとある(注9)。もっとも、この記述は若干事実と異なる。正しくは、明治22年(1889)4月に和佐村となったときに、政楠は村会議員に選ばれており(注10)、そのとき政楠は安政2年(1855)の生まれであるから、満で34歳になっている。幸之助氏がいう27歳より7歳上である。したがって、正確に言えば、「市町村制の実施によって、明治22年に、34歳で第一期の村会議員に選ばれている」ということであろう。

ところが、それから数年ののち、政楠は、先祖伝来の土地も家も人手に渡さなければならなくなってしまう。日清戦争〔明治27年~28年(1894~95)〕を契機として、日本の産業が勃興してきたとき、和歌山市に米穀取引所が設置され、盛んに米相場を立てるようになった。政楠は、多少、進取の気象があり、新しものしたさの気持ちがあったことから、この取引所に出入りして盛んに米相場に手を出し、大損してしまったのである。そのため松下家は、住み慣れた千旦ノ木をあとに和歌山(旧市内)へ移り住むことになった。明治32年(1899)幸之助氏が満4歳のころのことだという。

和歌山市内に移った政楠は、家財を売り払ったわずかなお金を元手に、和歌山市の繁華街、本町1丁目で、知人の肝煎りで下駄商を始めた。しかし、結局それも長続きせず、わずか1、2年のうちに店を畳んでしまう(注11)。

その後、政楠は手近な収入の道を求めて東奔西走し、いろいろな仕事に手を出してその日その日を過ごしていたが、期するところがあったのか、明治35年(1902)幸之助氏が小学校2年生の年に単身大阪に移住し、創立まもない私立大阪盲啞院に職を得て、そこで盲啞生の世話や事務的な雑務に従事することになった。そして、その盲啞院に勤めはじめてから4年ほどたった明治39年(1906)9月29日、幸之助氏が満11歳のときに、ふとした病みつきで、わずか3日のうちにこの世を去ってしまう。享年51歳であった。

この父政楠との思い出や政楠への想いについて、幸

之助氏はいろいろ語っている。たとえば、五代自転車商会で丁稚奉公をしていたときに、自転車に乗って使に行き帰る途中、大便をしくじってしまい、泣き泣き政楠のいる盲啞学校に走り込んだことがあった。政楠はその姿をみて驚き、「どうしたのか。どうしたのか」と声を立て立て、いたわって、始末をしてくれた。幸之助氏は「このときのことを、今でも思い出して父の愛の深さにしみじみ打たれる」と後年述懐している。

これに似たようなことはそのころしばしばあり、その都度幸之助氏は政楠に面倒をかけたというが、その間にも政楠は、口癖のように「出世しなければならん。昔から偉くなっている人は、皆小さい時から他人の家に奉公したり、苦勞して立派になっているのだから、決してつらく思わずよく辛抱せよ」といいきかせてくれたという。幸之助氏は、「父は先祖から受け継いだ多少の財産をなくしたことを済まぬと思うとともに、一人残った男の私の出世を、どんなにかして、と強く期待しておったことが、今静かに考えてみるとよくわかる」といっている（注12）。

また、つぎのようなこともあった。幸之助氏が11歳になったころ（明治39年ころ）それまで郷里の和歌山に住んでいた母と姉が、幸之助氏や政楠がいる関係で、大阪の天満に移ってきた（注13）。そして姉は読み書きができたので、大阪貯金局計算事務雇として勤めることになった（注14）。そこでたまたま給仕の募集があることを知り、そのことを母に伝えた。

母は、奉公している幸之助氏を手元で育てたいと思ったのであろう。幸之助氏に、「小学校を卒えてなくては、先で読み書きに不自由するだろうから、この際、給仕をして夜間は近くの学校へでも行ってはどうか」と勧めてくれた。もちろん幸之助氏にとって、それはたいへんうれしい話であった。

ところが、つぎに父に会ったとき、父はきっぱりと、こういった。「お母さんから、おまえの奉公をやめさせて、給仕に出し、夜は学校に通わせては、という話を聞いたが、わしは反対じゃ。奉公を続けて、やがて商売をもって身を立てよ。それがいちばんおまえのためやと思うから、志を変えず奉公を続けよ。今日、手紙一本よう書かん人でも、立派に商売をし、多くの人を使っている例が世間にたくさんあることを、お父さん

は知っている。商売で成功すれば、立派な人を雇うこともできるのだから、給仕など決してするのではない」

それでせつかくの母の思いであったが、幸之助氏は給仕になることを断念して、奉公を続けたのである。

この政楠の言葉は、奉公中はもとより、大阪電燈で働いていたときにも折々に思い出され、幸之助氏が独立して事業を始める動機を与える言葉となった。

父の政楠は、このように愛の鞭撻を幸之助氏に与えたが、そのとき子ども心にもとくに幸之助氏の胸を打ったのは、政楠が、してはならない相場に手を出し、先祖伝来の家産を使い果たして、家族にも先祖にもすまぬと思う心をもちながらも、名誉挽回のつもりか、母と時々争ってまで、少し手に小金ができると、そのわずかばかりを元手にして死ぬ際まで相場を続けていたことであった。政楠のこうした姿は、子どもながらも痛まれてならず、幸之助氏は、こうした父の姿を思い浮かべるたびに、また多少村で知られていた父や家名のことを考えて、父の鞭撻の言葉を思い浮かべるたびにしっかりやらねばならぬと考えたという。

父政楠がこの世を去ったことによって、幸之助氏は松下家の戸主として重責を担う身となった。政楠の亡くなったのち、母と姉（5番目の姉あい）は、なじみの薄い大阪にいるよりも住みなれた和歌山のほうがいいということで帰っていったが、幸之助氏は一人奉公を続けて、父政楠の遺志を受け継いで、商人として身を立てるべく奉公に励んだのである（注15）。

母とく枝のこと

母のとく枝は、安政3年（1856）1月9日に生まれ、大正2年（1913）8月14日、幸之助氏が満18歳のときに、和歌山で満57歳で亡くなっている。

幸之助氏によれば、とく枝は、「自分の子どもに対して、精いっぱい愛情をそそぐというような、どこにでもみられるいわば平凡な母親であった」という。幸之助氏は、奉公に出るまで母に抱かれて寝ていた。

しかし、とく枝は、掌中の珠のようにかわいがっていた末っ子の幸之助氏を、わずか9歳で手放さなければならなくなる。幸之助氏が尋常小学校4年の秋、単身大阪に働きに出ていた父から、幸之助氏を丁稚奉公によこすようにという手紙が届き、幸之助氏は南海鉄

道の紀ノ川駅から、一人汽車に乗って大阪に向かったのである。

そのとき駅まで見送りにいったとく枝は、心配と寂しさに胸が締めつけられる思いだったであろう。「体に気をつけてな。先方のご主人にかわいがってもらはんやで」と、目に涙を浮かべながら、こまごまと幸之助氏にいつてきかせ、大阪に行く乗客には、「子どもですが、大阪にまいりますので、あちらへ着けば迎えに来ています、どうかその途中よろしく頼みます」と、何度も何度も頭を下げて頼んだという。この晩秋の紀ノ川駅での情景は、いつまでも幸之助氏のまぶたに焼きついて離れなかった。

晩年、幸之助氏は「いまにして思えば、九歳の子どもを、自分の膝元から遠く手離さなければならなかったということは、母としては非常に辛いことであつたにちがいないと思う。…(略)…静かに考えてみると、そのときの母の思いは、大阪へ行ってからの私の幸せ、私の健康というものを、言葉では言いあらわせないくらい心に念じていてくれたんだ、という、母のその思いというものが、しみじみと私の心にかよってくるのである。私が今日、幸いにして健康に恵まれ、これまで仕事を進めてこられたのも、やはり私の将来というものを、心から祈ってくれた母の切なる願いの賜ものであろう」と述べている(注16)。

ただ、このように、自分に対する母とく枝の切なる思い、愛情を語る幸之助氏であるが、とく枝に関する幸之助氏の発言は、政楠に関する発言に比べて意外なほど少ない。やや詳しく語られているのは、この9歳で大阪へ奉公に出るときの紀ノ川駅での別れの場面と、さきあげた、大阪の天満に移り住んだときの給仕のエピソードくらいである。とくに政楠が亡くなって、とく枝が和歌山に帰って以降については、「母」が登場するのは、五代自転車商会から暇をもらうときに、「母病氣」というウソの電報を人に頼んで打ってもらったときと(注17)、母が亡くなったときくらいである。それも、『私の行き方考え方』では、「母はその後、姉一人を連れて和歌山に帰り、ささやかな生活を営んでおつたが、私が電燈会社へ変わって四年目の大正二年に、和歌山で亡くなった」と、簡単に触れられているだけである(注18)。この点についてはとくに、幼くして大

阪へ丁稚に出てからとく枝との接触が少なかったということもあろうが、とく枝が和歌山へ帰ってのちに再婚しており、そのことも影響しているのかもしれない。そこに何らかの蟠りといったものが幸之助氏にあったのかもしれない。

なお、付記すれば、幸之助氏は、父と母はそれぞれ一人っ子であったようで、おじもおばも、したがっていとこもいなかったということは何度かいつているが(注19)、実際は、とく枝のほうに兄弟が一人いて、その子、つまり幸之助氏のいここにあたる人も、そのいとこの子もいることが分かっている。ただ関係者に尋ねても、その続柄はいまひとつはつきりしない。

兄弟のこと

つぎに兄弟についてみてみよう。年譜をみて分かるように、幸之助氏には7人の兄姉がいた。

第一子、長女のイワは、明治7年(1874)9月28日に生まれている。幸之助氏とは20歳離れた姉である。大正10年(1921)(正確な日付は不明)、幸之助氏が満26歳のときに、満48歳で亡くなっており、兄弟のなかでは、幸之助氏に次いで長生きをしている。イワは、亀山長之助に嫁ぎ、明治34年(1901)8月、27歳のときに亀山武雄〔昭和2年(1927)から21年(1946)12月まで松下電器在籍、のち扶桑電球社長〕を生んでいる。したがって、その少し前に、亀山家に嫁いだものと思われる。幸之助氏は、奉公先の五代自転車商会を辞し、大阪電燈株式会社に就職が決まるまでの数カ月間〔明治43年(1910)6月~10月〕を、この亀山長之助・イワ夫妻の家に居候している。幸之助氏に見合いを勧め、立ち会ったのもこの姉夫婦で、この姉夫婦宅で幸之助氏は、むめの夫人と大正4年(1915)9月4日に祝言をあげている(注20)。

第二子、長男の伊三郎は、明治10年(1877)9月2日に生まれている。幸之助氏とは17歳違いである。伊三郎は、幸之助氏が生まれたころ、当時和歌山県下の一つしかなかった中学校(和歌山中学)に通っていたが、下駄商を始めたとき、中学校を4年で中退して、小僧代わりに父を助けたという(注21)。しかし、ここで疑問に思われることがある。それは、和歌山に移り住んで下駄商を始めたとき、すなわち、明治32年(1899)

には、伊三郎はすでに満で21、22歳になっていたことである。そのときまだ中学校に通っていたとはおよそ考えられない。下駄商を始めたとき、中学校を4年で中退して、小僧代わりに父を助けたというのは幸之助氏の思い違いなのであろうか。

その後、和歌山市内で始めた下駄商が1、2年後に店を閉めることになると、伊三郎は、創立まもない和歌山紡績〔明治20年（1887）創立。和歌山市伝法橋南ノ丁に立地し、明治22年（1889）7月から操業を始めた。現在の和歌山紡績の前身の一つ〕の事務員に就職したが、34年（1901）8月22日、幸之助氏が満6歳のときに満23歳で亡くなった。

第三子、次女房枝は、明治13年（1880）9月13日に生まれ、幸之助氏が小学校に入学して間もない34年（1901）4月17日、長男の伊三郎に先立つこと4カ月、満20歳で亡くなっている。

第四子、次男八郎は、明治15年（1882）12月21日に生まれ、33年（1900）10月4日、幸之助氏が5歳のときに、満17歳で、兄弟のなかでいちばん早く亡くなった。

第五子、三女チヨは、明治18年（1885）4月19日に生まれ、39年（1906）5月28日、父政楠に先立つこと4カ月、幸之助氏が11歳のときに、満21歳で亡くなっている。

第六子、四女ハナは、明治21年（1888）6月12日に生まれ、39年（1906）4月17日、父政楠に先立つこと5カ月、三女チヨが亡くなる1カ月前に、満17歳で亡くなっている。

第七子、五女あいは、明治24年（1891）2月20日に生まれ、大正8年（1919）幸之助氏が24歳ころに満28歳で亡くなっている。政楠の亡くなったあと、とく枝と和歌山に帰り、何年か後に、有本昇三に嫁いだ。なお、この有本は、あいの亡くなったあとしばらくして、昭和2年（1927）に、松下電器（当時、松下電気器具製作所）に入社している（注22）。

以上のことから松下家を見ると、幸之助氏が生まれたとき、家族は父母と兄弟併せて10人であったと思われる（注23）。そして、幸之助氏が満26歳になるまでに、幸之助氏一人を残して父母兄弟9人全員が亡くなったことが分かる。

3．和歌山での幸之助氏の生活と主な体験および感懐

千旦から和歌山市内へ

つぎに、和歌山での松下幸之助氏の生活と主な体験、感懐などを年代を追ってみよう。

幸之助氏は、生まれてから和歌山市内に移るまでの約4年間を和佐村字千旦ノ木で過ごした。この当時のことについては、子守に負われて小川で魚を捕ったり、ドジョウすくいをやったり、鬼ごっこをしたり、夕暮れに子守の背中に負ぶさって、子守唄を聞きつつ村の畦道をうとうとしながら家へ帰ったといったようなことをうっすらと覚えているという。幸之助氏は末っ子ということで、掌中の珠のように兄弟じゅうでいちばんかわいがられ、平凡で幸福な生い立ちを続けていた（注24）。

ところが、父政楠が米相場に失敗したため、先祖伝来の土地も家も人手に渡さなければならなくなり、松下一家は生まれた土地を捨てて和歌山市へ出ていくことになる。それは明治32年（1899）幸之助氏が4歳ころのことだというのが、何月のことなのかは定かではない。なお、残された記録によれば、松下家の本宅および付属建物、倉庫、宅地、農地などは明治30年（1897）に近隣の人々数人に売却処分されている。この記録が正しいとすれば、処分したのち、和歌山市内に移り住むまで2年ほど時間のずれがある。その間はどうしていたのだろうか。処分後も、そこに住み続けることができたのか。あるいは近所のどこか違うところに身を寄せていたのか。和歌山市に移った年が違っている可能性もあるが、この点については、判然としない。

ともかくも松下家は千旦から和歌山市の銀座ともいふべき本町1丁目に転居し、そこで政楠は、借金を返して残ったわずかなお金をもとに、知人の下駄屋の肝煎りで下駄商を始めた。和歌山市は、さきの戦争で何度か空襲にあい、とくに昭和20年（1945）7月9日夜の空襲はすさまじく、市の3分の2が灰燼に帰している。そのため、今日の和歌山市は明治のころとは道幅や町並みもすっかり変わっているが、今でも本町通り

は、銀行や証券会社、保険会社のビルが建ち並ぶ和歌山市の中心である。ただ、松下家が移り住んだ1丁目の家の所在地は、今日では特定することはできない。この本町1丁目に移り住んできたとき、まだ4歳であった幸之助氏は、そのような一家の移り変わりにはほとんど無関心で、日々母の膝下で遊んでいた(注25)。

下駄商の失敗と兄妹の死

しかし結局下駄商もうまくいかず、わずか1、2年を経ずして店を畳むことになる。そのため経済的にも一家はだんだんと窮迫し、父は手近な収入の道を求めて東奔西走した。そのときの父の姿は、かすかではあるが、いつまでも幸之助氏の脳裡に残ったという。

このとき、長兄の伊三郎は、世話をする人があって、和歌山紡績の事務員に就職していたが、うまくいかないときは、すべてがうまくいかないものである。次兄の八郎が明治33年(1900)10月4日、幸之助氏5歳の秋に、病気で亡くなったのである。満17歳の若さであった。しかも不幸は重なるもので、その半年後、明治34年(1901)幸之助氏が小学校に入学して間もないと思われる4月17日、次姉の房枝が満20歳で病没し、さらにその4カ月後の8月22日には、最も頼りにしていた長兄の伊三郎が、満23歳の若さで病没した。

この兄妹の亡くなった原因や順番などの詳細については、『研究レポート』通巻9号(1995)で取りあげたが、その死因については、肺結核で死んだということが多くのところ語られている(注26)ほか、流行性感冒で亡くなったとされているものもある。また亡くなった順番についても、『松下電器五十年の略史』(1968)には「長兄と次兄、長姉が流感のため相次いで死亡し」とあり、『私の行き方考え方』にも、「私が小学校に入学した年(明治34年)兄(長兄)は、世話を人あって創立まもない和歌山紡績の事務員に就職していたが、ふとした風引きから病みつき、わずか三カ月余の患いであえなくこの世を去った。ところが引き続いて同じ年、次兄と長姉も相ついで病没した。今思うと流行性感冒かなにかそういう病気にかかったものと思う」(括弧内筆者)とあるが(注27)、いまみてきたように、ここで「長姉」とあるのは正しくは「次姉」であり、亡くなった順番も、次兄八郎、次姉房枝、

長兄伊三郎の順番であることが分かっている。しかし、亡くなった原因については、結核なのか流感なのかはよく分からない。あるいは両方重なったことでもあったとも考えられる。

当時のことを偲んで、幸之助氏は、「たださえ窮乏に迫っているところへかくのごとき状態であるから、父母は精神的にも、財政的にも、非常な打撃を受けたものである。当時の母の愚痴なり、その疲れた姿を思い出すとほんとうに気の毒にたえない。それでも母はそういう窮乏のなかであって、末子の私をよく愛してくれたもので、今でもしみじみと思い出される。二兄を失った両親としては末子の自分を心ひそかに力強く楽しみにしていたのであろう。せめて今まで、たとえ片親だけでも生きていてくれたならばと、この点だけが残念でならない」と後年語っている(注28)。

こういった家庭の状態に、政楠は焦慮し、いろいろな仕事に手を出してその日その日を過ごしていたが、先述したように、明治35年(1902)7月、幸之助氏が小学校2年生のとき、単身大阪にへ移住し、私立大阪盲啞院に勤務することになった。

このとき和歌山に残された家族は、母(当時45歳)と姉3人(当時チヨ16歳、ハナ13歳、あい11歳)と幸之助氏(当時7歳)の5人であったと思われる。長姉のイワはこのときすでに亀山長之助に嫁いでおり、前年、明治34年(1901)に息子(亀山武雄)を生んでいる。ただ他のお姉さん、とくに3番目の姉チヨは満で16歳になっており、どこかに働きに出ていたとも考えられるので、あるいは4人であったかもしれない。いずれにせよ、残された母子は、政楠からのわずかばかりの仕送りで、貧しいながらも平和で安定した生活ができるようになり、幸之助氏も無邪気な小学生生活を送っていた。

小学生時代の生活

ここで、幸之助氏の小学生生活について触れておこう。4年足らずで小学校を中退した幸之助氏だが、病気のため、実際に学校に通ったのは、2年半くらいだったようである(注29)。したがって、幸之助氏の学校時代の思い出はそれほど多くない。

幸之助氏の通っていた小学校は、雄(おの)尋常小

学校といい、和歌山市湊紺屋町1丁目にあった。南海和歌山市駅から南へ150メートルほどのところである。この小学校は、戦後、昭和21年(1946)3月、湊南(そうなん)小学校という学校と合併して、雄湊(おのみなど)小学校と名前が変わり、場所も南へ700メートルほど下ったところ(東坂ノ上丁)に移っている。また、かつて雄小学校があった湊紺屋町の跡地は、現在、酒造メーカーの工場となっている。

この雄尋常小学校での思い出として、少ないながらも、しばしば語られているのは、2年から4年のときの担任であった村上先生のことである。幸之助氏によれば、村上先生は、非常に親切ないい先生であった。50がらみの(45、6と書かれているものもある)たいへん温厚な先生で、悪いことをしたときには怖かったが、いつもはにこにこことやさしく、親のように生徒たちをかわいがってくれたという(注30)。日曜や土曜の放課後には、友達と先生の家へよく遊びに行き、将棋を覚え、友達に勝って先生にほめられたことや、庭にはミカンやカキの木もあり、よい遊び場であったことなどを、思い出として記している(注31)。

また、副級長になったことも語っている。3、4年生になると、級長を決めるのに、選挙をするようになり、幸之助氏は、副級長(最高点が級長で、次点が副級長)に1回選ばれた記憶があるという。

学校の成績は、幸之助氏の語るところによると、それほど優秀ではなかったようである。平均点よりちょっと上で、考えものはよかったが、暗記ものはダメで、習字や作文も苦手であった。甲乙丙丁の評価で、算術が甲で、唱歌や書き取り、暗記ものは乙か丙だったという(注32)。

それから、当時の思い出としては、学校の祝祭日に、多くの生徒はみな、小倉の袴をつけていくのに、幸之助氏はそれを買ってもらえず、少し絹入りの袴をはかされた。それが恥ずかしくて、祝祭日というと、いやだいやだといって母を困らせたことなども語っている。

このころの幸之助氏の生活は、どのようなものだったのであろうか。幸之助氏は、よくお城(和歌山城)で遊んだことや、紀ノ川でエビをすくったりしたこと、紀ノ川の水が非常にきれいだったことなどを思い出として語っている。また、当時、学校から帰ると、母親

から小遣いに穴のあいた1厘銭(1文銭)をもらい、それを持って近所の駄菓子屋へ行ってアメ玉を2個買うのが日課になっていた。それが楽しみの第一だったという。そのころの食事はどうであったかといえば、お腹いっぱいご飯を食べることができなかったようである。だいたい和歌山では朝はおかゆ(茶がゆ)で、昼はご飯であったが、幸之助氏の家ではご飯がなく、昼もおかゆ、下手をすると晩もおかゆというような状態で、腹いっぱい食べても、じきに減ってしまい、いつも空腹でひもじい思いをしていたという(注33)。

ところで、当時、幸之助氏はどこに住んでいたのであろうか。幸之助氏は、ある対談で、「住まいが湊だったので、(紀ノ川に)近いからよくエビをすくいに行った」(括弧内筆者)と語っている(注34)。そして和歌山の「裏長屋の中でも一番小さい家に住んでおった」という(注35)。

最初、千旦から和歌山の旧市内に移り住んだときの住まいは、下駄商を始めた本町1丁目であったと思われる。しかし、そこは和歌山市のいわば目抜き通りに面しており、家賃も高かったと想像される。よって、店を閉めてから(幸之助氏がまだ小学校に上がる前、明治33年ころのことと思われる)そこを引き払い、湊の裏長屋に引っ越したのではないかと推測される。あるいは、初めから店と住むところとは別で、住まいは最初から湊の裏長屋だったということも考えられる。しかし、当時裏長屋とはいえ、店のほかに住むところを別に借りることは、経済的に苦しかったであろうし、「今かすかに覚えているが、当時、偽造銀貨が多かったものか、店のお客からもらった五十銭銀貨を、父や母はいつも打ち盤でたたいたり、銀貨どうしをチンチンいわしてよく調べていたことがあった」という幸之助氏の回想もあるので(注36)、やはり最初の住まいは店と同じ本町1丁目、その後、店を閉めたときに、湊の裏長屋へ転居したと考えるのが自然であろう。

ただ、今回ゆかりの地取材したなかで、幸之助氏は、和歌山市四筋目というところに住んでいたという情報を得た。四筋目は、南海の和歌山市駅から北東へ5~600メートル行ったところである。これに関しては、いつかの時点で、たとえば湊に移る前に、そこで住んでいた可能性はあろう。その場合は、店を閉めてから

政楠が大阪へ単身移住する（明治 35 年 7 月、幸之助氏が 2 年生のとき）までのおよそ 2 年間でそこで住まい、そのあとで残された母子が湊に転居したということになると考えられる。

だが、これについても、幸之助氏が小学校に上がった当時の和歌山市はいくつかの学区に分かれており、四筋目は雄尋常小学校の学区ではない。幸之助氏が転校したという話も聞かないし、越境入学をしたとも思われないので、この四筋目に住んでいたという話は、やや信憑性に欠けるように思われる。やはり幸之助氏が小学校に通っていた 4 年間は、雄尋常小学校の学区内の、学校からそう遠くない湊のどこかの裏長屋に住んでいたと考えるのが妥当であろう。だが、その正確な住所は不明である。

紀ノ川駅から単身大阪へ

しかし、そのように小学生生活を送っていた幸之助氏であったが、4 年の秋、11 月になって、父の政楠から手紙が届き、「幸之助も、もう 4 年生で、もう少しで卒業するが、大阪の八幡筋にある心やすい宮田という火鉢屋で小僧がいるとのことであるから、ちょうど幸いだから幸之助をよこせ」といつてきたことを母のとく枝から聞かされた。そのときのことを、幸之助氏ははっきり覚えていないというが（注 37）話は早速決まって、前述のとおり、幸之助氏は小学校修了を 4 カ月残して中退し、単身大阪に発つべく南海鉄道の紀ノ川駅へ向かった。明治 37 年（1904）11 月 23 日、満 10 歳の誕生日を 4 日後に控えた晩秋のことである。荷物は着がえのシャツなどを入れたふるしき包み一つで、着のみ着のままの姿といってもよかった。このとき幸之助氏は、母と別れる寂しさや、まだみぬ大阪に対するあこがれ、母が涙で話す注意のことば、初めて汽車に乗るうれしさなど、こもごもいよいよい感に打たれたという。とくに紀ノ川駅まで送って来てくれた母の、隣の席の人に「よろしく願います」と頼んでくれた寂しそうな顔が忘れられないと、後年語っている。

この南海鉄道（現・南海電気鉄道）の紀ノ川駅は紀ノ川の北岸（右岸）にあり、『南海電気鉄道百年史』（1985）によれば、明治 31 年（1898）10 月に開業して

いる。そして『私の行き方考え方』には、括弧して「（当時南海電鉄は今の和歌山市駅まで開通しておらず、紀ノ川北岸が終点であった）」とある。

ところが、同史によると、南海鉄道の和歌山市駅（紀ノ川の南岸に位置している）は、明治 36 年（1903）3 月 21 日に開業している。つまり、幸之助氏が単身大阪に向かった明治 37 年（1904）11 月 23 日の時点では、すでに南海鉄道は紀ノ川を越え、和歌山市駅まで開通していたのである。幸之助氏が住んでいたところが、湊であれば、和歌山市駅のほうが近かったはずである。かりに住まいが四筋目であったとしても、四筋目は紀ノ川駅より和歌山市駅にはるかに近いところにある。なのになぜ、わざわざ紀ノ川を渡って、北岸の紀ノ川駅まで行き、そこから乗ったのであろうか。また、湊や四筋目に住んでいれば、当時すでに和歌山市駅まで汽車が通っていたことは分かるはずである。とくに四筋目は、目の前に南海の線路が走っている。それなのになぜ、和歌山市駅まで開通してなかったと書いているのであろうか。

幸之助氏が紀ノ川駅での母親との別れを何度となく語り、そのときの情景は今でもはっきりと覚えていると述べていることを考えれば、駅名を思い違えているとは考えられない。明治 37 年という年も間違いあるまい。

一つ考えられるのは、幸之助氏が単身大阪に向かうころ、紀ノ川駅の近くに住んでいたことである。これについては、実はこれまで、湊という場所を、和歌山市駅の南側に位置する地域と考えていたが、この湊というところは、対岸（紀ノ川北岸）にもあり、そこだと、川を渡って和歌山市駅に来ずに紀ノ川駅に行っても不思議ではない。しかし、その対岸（紀ノ川北岸）にある湊が南岸にある雄尋常小学校の学区であればともかく、そうでなければ、その可能性は少ないであろう。

あるいは、とく枝と 2 人で、和歌山市駅から汽車に乗り、つぎの紀ノ川駅でとく枝がおりで、別れたということも考えられる。その間に、隣に座っている人に、よろしく頼んだというわけである。さらには、和歌山市駅のほうが近かったが、人目を避けて、あるいは別れがたくて、もしくは一駅でも運賃を浮かそうと、

一駅分を2人で歩いて紀ノ川駅まで行ったということも考えられる。しかし、いずれも説得性に欠ける。真相は、まさに藪の中である。

なお、難波駅から和歌山市駅まで全通した当時の南海の運転状況は、午前5時から午後9時までの間に、上下各11本の普通列車と1本の急行列車を運行し、所要時間は、普通列車で2時間半、急行列車で2時間、運賃は3等運賃が59銭だったという(注38)。幸之助氏は、2時間半ほど汽車に揺られて、大阪・難波の駅に降り立ったのである。

さらに、これは蛇足になるが、細かいことをいえば、この紀ノ川駅での別れの場面で、母子2人が紀ノ川駅に行くとき、渡して紀ノ川を渡ったと書かれている「松下幸之助伝」が少なからずある。しかし、紀ノ川には当時すでに橋がかかっていたので、それを渡って紀ノ川駅へ行ったと考えるのが妥当であろう。また、とく枝がよろしくと頼んだ乗客についても、多くの場合、中年のおじさんとして描かれているが、実は“おばさん”だったようである。ある記者団との懇談会の席で、幸之助氏は「和歌山に紀ノ川駅という駅があったんです。橋がむこう(紀ノ川の南岸のほう)に越えていなかったんですよ。そこから汽車に乗って。お母さんが駅まで送ってくれてね、それで一緒に汽車に乗っているおばさんに、どこのおばさんや知らんけどね、『この子、大阪へ行きまんののでひとつ連れて行ってください』って頼んだんやね。そしたらそのおばさんが『連れていったげます』というようなもんやね」(括弧内筆者)とはっきりいっている(注39)。したがって、今後小説や伝記でこの場面を描くときには、このあたりを考慮して描く必要がある。

ともあれ、こうして9歳の秋、幸之助氏はいよいよ商都大阪に向かった。時あたかも日露戦争の真っ最中であった。

4. 考え方、性格に与えたと思われる幼少年時代の体験

さて、松下幸之助氏の和歌山時代の家庭環境や生活、さまざまな体験を概観してきたわけだが、最後に、こ

れまでみてきたそれらの事柄が、その後の幸之助氏の考え方や性格、とくに経営哲学にどのような影響を与えたのかということ考察してみたい。

まず指摘したいのは、両親、とくに父親の影響である。さきにみたように、父政楠は、商売で身を立てよと、幸之助氏によくいっていた。これは、和歌山にいたときではなく、大阪の船場で奉公をしていたことであるから、そこで取りあげるべきことかもしれないし、考え方そのものへの直接的な影響ということではないが、幸之助氏の奉公時代、それから大阪電燈での勤め人時代において、この父の言葉、幸之助氏への思いは、おりおり幸之助氏を支え、独立を決心するに際してきわめて大きな役割を果たした。後年、幸之助氏は、「今思うとさすがに父は当を得た考えを持っていたと、自分の今日あるをかえりみて、父のことをしみじみと思う」と述べている(注40)。

もっとも、そのように父の見識を語り、感謝する一方で、政楠は、幸之助氏にとって反面教師でもあった。政楠がとく枝と時々争ってまで、少し手に小金ができると、そのわずかばかりを元手にして死ぬ際まで相場を続けていた姿は、子どもごころにも痛まれてならなかったと後年幸之助氏は語っているが、そのとき幸之助氏は、この父のようにだけはなってはならないと肝に銘じたにちがいない。そしてそうした相場に手を出し、悲惨な状態に陥った父の姿から、経営と人生は賭事ではない、投機は絶対しないという幸之助氏の経営哲学、人生哲学が生まれたといえよう。幸之助氏自身も、「投機、思惑、バクチを、僕が大きらいなのは、子供のころの悲しい思い出がハダにしみついているからだと思います」といっている(注41)。

経営哲学ということでは、幸之助氏がその重要性を説いた「ダム経営」といった考え方も、こうした幼いころの体験が影響を与えているのではなからうか。「ダム経営」とは、河川の水をダムに蓄えて、季節や天候に関係なく必要な水を確保するように、企業の経営においても、いろいろなダム、いいかえれば、ゆとりというか、余裕というか、そういうものをもって経営を進めていくことが大事だというものである。お金、資金のダム、人材のダム、技術のダム、さらには在庫、設備のダムなど、適正なゆとりをもった経営は、少々

の外部情勢の変化に左右されることなく、安定した発展を遂げることができるというわけだが、こうした考えの下地というか、原点となっているのは、やはり4歳のときに家運が傾き、家族が悲惨な目にあったことが大きいのではなからうか。破産することがいかに惨めでつらいことかということ、両親の話や姿を通じて、あるいは自分自身の体験を通じて身にしみて知っていたため、企業経営を進めていくについては、万が一にも倒産して、あい寄っている人たちが路頭に迷うようなことがないよう、できるかぎりの余裕、ゆとりをもった経営をしていかなければならないと考えたのではなからうか。

それから、これは経営哲学ということから離れるが、父の影響ということではなからうか。父政楠の性格について、幸之助氏は「進取の気性があり、新しものしたさの気持ちがあった」といっているが(注42) 幸之助氏の旺盛な好奇心、新機軸を追求する心を見ると、父の血を幸之助氏も受け継いでいるように思われる。

一方、母親の影響ということでは、幸之助氏は、「女性について話すということになると、まず私の頭に浮かぶのは、月並みのようであるが、やはり“母”その人なのである」と語り、母の力というもの、母の愛情の偉大さというものはかけがえのないものであるといっている。そして女性にとって何がいちばん大切かということ、やはり、愛情が深いということではないか、愛情にあふれた女性に接すると、そこにもっとも女らしい美しさを感じるし、またそのような姿になることが、男性を幸せにし、みずからをも幸せにする道ではないかと説いている。そしてさらに、女性としては、愛情、思いやり、親切、といった心の面の豊かさがまず大切であり、これには、すべてのものを溶かすといっているほどの、大きな力がひそんでいるのではないかと語り、これが女性の身上であり、ここにまた女性の尊さがあると思うと述べている(注43)。このように、母が自分に与えてくれた、あふれるような、ひたすらな愛というものに、女性としてのあるべき姿、価値を幸之助氏はみている。

家族による影響ということではつけ加えれば、両親や兄弟が次々に亡くなって、家族に恵まれなかったこと

も、幸之助氏の人生観や事業を進めていく上に、何らかの影響を与えたと考えられる。たとえば、いつ自分も兄や姉のように結核にかかって死ぬか分からないといった死といつも隣り合わせの感覚は、死に対する恐怖や物事に対する周到さ、慎重さをもたらすとともに、その一方で、ある種の諦観と大胆さを幸之助氏に与えたように思われる。あるいは、身内に恵まれなかった寂しさが、松下電器の経営を「家族主義的経営」に向かわせる一因となったということもあるのではなからうか。

和歌山時代において、幸之助氏が受けた人による影響ということでは、村上先生もその一人としてあげられよう。幸之助氏は、「すべての先生が、村上先生のように、しかるときはきびしくしかるが、いつも親のような大きな愛情をもって、生徒を指導する先生であってほしいと思う。また、そのようなきびしさと、大きな愛情のなかであって、生徒のひとりひとりが先生をうやまい、したうというところに、人間としてのひとつのしあわせがあるのではないかと、思う」といっている(注44)。“寛厳よるしきを得る”ことが人を育てる上で大切だと幸之助氏は説いていたが、そういった考え方なり、学校の先生のあり方、望ましい先生像に対する幸之助氏の考え方は、村上先生との思い出が大きく与って力となっているといえよう。

あるいは、幸之助氏の性格といったものについても、小さなときの生活環境などによって形成されたものも少なくないように思われる。

まず幸之助氏は、非常に気の短い一面があった。とくに若いころは、直情径行で、それを伝える数多くのエピソードが残されている。あるいは、幸之助氏は、自分自身でもいっているが、神経質で、気弱なところがあった。そういった性格は、もちろん生まれつきのものもあるが、「三つ子の魂百まで」といわれるように、4歳くらいまで裕福な家庭で何不自由なく育ち、しかも末子としてかわいがられ、甘やかされて育ったことも大きいのではなからうか。

また、ふつう貧しい生活をしていると、人をうらやんだり、ねたんだり、我が身の不幸を嘆きがちなものだが、幸之助氏には世をすねたりいじけたりしたところがない。何ごとに対しても正攻法で当たってきた。

それもやはり裕福な生活を経験したこと、ごく小さなときの乳母日傘で育った境遇に負うところが大きいように思われる。幼少のころにそうした恵まれた境遇にあったから、その後、ご飯も満足に食べられない貧乏を経験したとしても、ひがみっぽくならなかったのではなかろうか。いや、貧乏を経験したことが、幸之助氏には、むしろプラスに働いて、感謝の心や少々のことでは動じない胆力を育むことになったといえよう。

だいたいこのようなことが、幼少年時代の家庭環境や生活がその後の幸之助氏の考え方や性格に与えた影響としてあげられるように思われる。もちろんいまあげたものはあくまでも推察であり、正鵠を射たものであるかどうかは分からない。あるいはまた、これら以外にも、考え方や性格に影響を与えたものはあるであろうし、いろいろ指摘することもできるであろうが、とりあえずここでは以上の点をあげておきたい。

5. おわりに

本稿では、松下幸之助氏の和歌山時代、すなわち幼少年時代について考察してきた。まず幸之助氏をとりまく当時の家庭環境がどのようなものであったかを概

観し、つぎに当時の幸之助氏の生活や体験を、事実関係の解明を図りながら辿り、最後に、それらの家庭環境や生活、体験が、その後の幸之助氏の性格や考え方、とくに経営哲学に及ぼしたと思われる点について考察を進めてきたわけである。

冒頭に述べたように、幸之助氏のこの時代に関する資料はきわめてかぎられており、また不明の部分が多いこと、しかもその記述や発言に矛盾する点が多くみられることが、あらためて明らかになったのではないかと思う。

そうした不明の部分、矛盾する点を解明すべく、今回、当時の幸之助氏をとりまく家庭の状況や生活や体験を一つひとつ年代に沿って丹念に追ったわけだが、いかんせん 100 年も前のことであるため、結局未解明の部分が多く残ってしまった。否、むしろ謎の部分が増えてしまった観さえある。それらの不明の部分をすべて解明することは、今となってはほとんど不可能であろうが、しかし今後も可能なかぎり調査、考察を進めていかなければならないと思う。そして経営哲学にかぎらず、さまざまな角度から松下幸之助という“人間”に迫り、“松下幸之助研究”をさらに深めかつ広げていきたいと考えている。

<注>

- 1) 明治 29 年 (1896) 4 月 1 日に、名草・海部両郡の領域が海草郡と称されるようになった。したがって、正確に言えば、幸之助氏が生まれたときはまだ海草郡ではなかったことになる。
- 2) 秦野南嶽『和佐五千年史』、1966 年、pp.46-47.。以下、和佐の歴史の記述については、おおむねこの『和佐五千年史』に依拠している。
- 3) 松下幸之助『道は明日に』、1974 年、p. 9.
- 4) 松下家の菩提寺は、中和佐にある浄土真宗本派本願寺 (西本願寺) 派極楽寺であったが、現在は松下家累代墓を「生誕の地」に移し、幸之助氏もそこに眠っている。
- 5) 『私の行き方考え方』のなかで、幸之助氏は、幸之助氏がまだ生まれていない時分に松下家に女中奉公をしていたという婦人から聞いた話を書いている。それによれば、その婦人が女中奉公していた時分には、父 (政楠) のほかに祖父 (房右衛門) もまだ生きていたそうで、房右衛門はとても立派な体格で 80 歳を越えても壮者をしてのぐようであったという。それに百姓には珍しく関羽ひげをはやして、いつもそれをしごきながらゆうゆうと暮らしていたそうで、自治制が敷かれて、政楠が最初の村会議員に選ばれるという家柄は、この祖父房右衛門

- が多く築きあげたものだという。房右衛門は 81 歳で亡くなり、祖母（名前不詳）は 73 歳まで生きたということである（PHP 文庫、1986 年、p.159）
- 6) 前掲『和佐五千年史』、p.110.。慶長の検地によって全国の田地は上々田、上田、中田、下田、下々田の 5 段階に分けられ、上々田は最高の田とされた。
 - 7) 私のふるさと「サンケイ新聞」昭和 42 年（1967）11 月 26 日。雷が落ちたとき、松ヤニが燃え出して、枝の折れたあとから黒い煙が吹き出したため、消防士がホースを持って木に登り、梢から水を注いだ。そして村の人が総出で、土に藁をこねて、煙の出る穴にそれを詰めたという。
 - 8) 「十一の年に国の母や家族が、父も自分も大阪にいる関係から、住み慣れた和歌山を発って天満の一隅に移り住んだ」（前掲『私の行き方考え方』PHP 文庫、p.28.）とあるのみで、いつ母と姉が和歌山から大阪の天満に移り住んだのかははっきりしない。3 番目の姉チヨと 4 番目の姉ハナが亡くなったあとなのか、それとも前なのか。2 人の姉が和歌山で亡くなったのであれば、天満に移ったのは母と 5 番目の姉あいの 2 人だけであるが、「母や家族が」といっていることから推察すると、母と姉 3 人、合計 4 人で天満に引っ越してき、その後 2 人の姉が大阪で亡くなったというほうが可能性が高いと思われる。
 - 9) 前掲『道は明日に』、p.10.、『松下政経塾塾長講話録』、1981 年、p.55. ほか
 - 10) 前掲『和佐五千年史』には、明治 22 年（1889）4 月 19 日と明治 25 年（1892）3 月 30 日に当選した村会議員の中に松下政楠の名がみられる。
 - 11) 下駄商を明治 32 年（1899）の何月から何年の何月まで、どのくらいの期間営んでいたのか、正確なところは分からない。幸之助氏の発言も、「明治 32 年、4 歳のとき」とあるのみで、期間も、「約二年余にして閉店のやむなきに至った」（『私の行き方考え方』PHP 文庫、p.16.）「この下駄屋も一年ほどやって、また失敗したわけです」（前掲『道は明日に』、p.11.）「二年後に閉店を余儀なくされた」（松下電器産業株式会社『松下電器五十年の略史』、1968 年、p.6.）など、バラツキがある。
 - 12) 前掲『私の行き方考え方』PHP 文庫、pp.27-28.
 - 13) 注 8 参照。
 - 14) この大阪貯金局に勤めていた姉は何番目の姉のことであろうか。3 番目の姉チヨか、4 番目の姉ハナか、5 番目の姉あいか。幸之助氏が 11 歳のとき、チヨは満 21 歳、ハナは満 17 歳、あいは満 15 歳である。年齢からいくと、チヨかハナと考えられるが、ハナは明治 39 年（1906）4 月 17 日に、チヨも同年 5 月 28 日に亡くなっている。この話があったのは、いつのことだったのか。
 - 15) 前掲『私の行き方考え方』PHP 文庫、pp.33-34.
 - 16) 『その心意気やよし』PHP 文庫、1992 年、pp.219-220.
 - 17) 「母病気の電報を打たした」（『私の行き方考え方』PHP 文庫、p.37.）とあるが、だれに打ってもらったのかは分からない。前後の文脈からすると、姉（長姉イワ）夫婦のようであるが、あるいは親しい友人であったのかもしれない。
 - 18) 前掲『私の行き方考え方』PHP 文庫、p.55.
 - 19) 「私の両親にはきょうだいなかった。お父さんにも、お母さんにもない。つまり、おじ、おばがないわけです。従っていともない。天涯孤独になってしまった。血のつながる人は他にもあったと思うけれど、濃い親戚というのはほとんどないわけです」（前掲『松下政経塾塾長講話録』、p.56.）ほか。
 - 20) 亀山家は、以前、千旦の松下家の近所にあったという。つまり、イワは家のすぐ近くの、おそらく幼なじみであったであろう人のもとに嫁いだことになる。それがいつであったのか。松下家が千旦を離れて和歌山市内に移り住む明治 32 年（1899）時点で、イワは満で 24、5 歳になっていたことを考えると、和歌山に転居する前に嫁いだ確率が高いと思われる。また、長之助・イワ夫婦がいつ和歌山から大阪へ出ていったのかということも

- 不詳である。なお、現在亀山家の家は千旦にはなく、ただ先祖代々の墓が、禰宜の安養寺におかれている。
- 21) 前掲『道は明日に』、p.11.、前掲『私の行き方考え方』PHP文庫、p.15.
- 22)「この子供(長男幸一)の死去が動機となって、これも今は亡き亀山の義兄(長之助)が店を手伝うことになり、それに続いて亀山武雄も、また義兄の有本も入所することになった。子供の霊が三人を呼び寄せたのか、それは知る由もないが、自分にはなんだかそういうように感じられた。亀山武雄は当時すでに小さいながら電気器具の製造を始め、一部は松下電器の下請けをしていた。こんなことで、子供を亡くしたが義兄や甥が三人も入所するありさまで、また慰められるところもあった。実に昭和二年は思い出の多い年であった」(括弧内筆者)(前掲『私の行き方考え方』PHP文庫、p.227.)
- 23)したがって、『私の行き方考え方』に「私の生まれた当時、家族は両親と兄弟姉妹ともで八人で、」(PHP文庫、p.14.)とあるのは、10人に訂正すべきであろう。もっとも、このとき長姉のイワは満20歳になっていたので、当時結婚が早かったことからすると、すでに結婚して家を出ていたことも考えられる。しかし、イワの子の亀山武雄が明治34年(1901)8月生まれなので、その少し前に亀山家に嫁いだものと思われ、幸之助氏が生まれたときはまだ結婚していなかった可能性のほうが高いであろう(注20参照)。
- 24) 前掲『私の行き方考え方』PHP文庫、pp.14-15.
- 25) 同上、p.15.
- 26)「実はぼくの兄貴が二人と姉が一人、この三人とも肺結核で死んだんです。で、ぼくはそれをいちばん恐れてたわけです」〔高峰三枝子氏との対談「主婦と生活社 きょうばし特報」昭和45年(1970)4月発刊『松下幸之助発言集』第14巻、p.94.〕
- 「兄貴二人と姉三人は肺結核や。一年のあいだに三人死んだ。それで肺結核が子ども心にしみこんでおったわけや。で非常に怖いんやね」〔昭和36年(1961)3月14日・機械記者クラブ懇談会『松下幸之助発言集』第20巻、p.184.〕
- 「八人の兄弟も六人亡くなっていて、しかもそのうちの三人は結核で亡くなりました」〔NHK総合テレビ「私と健康」昭和37年(1962)6月2日放映『松下幸之助発言集』第17巻、p.76.〕
- 「私の兄、また姉が全部結核で死んでいるんですよ」(NHKラジオ放送 昭和37年7月14日『松下幸之助発言集』第8巻、p.275.)
- 「兄貴も、そのつぎの兄貴も、みんな肺病で死んでいましたからね」(石垣純二氏との対談「毎日ライフ」昭和45年2月号『松下幸之助発言集』第14巻、p.59.)
- 「兄が二人とも肺結核で亡くなっているということをお子心に聞いていた」〔昭和33年(1958)10月28日・新政経大会での講演、昭和36年5月4日・NHK放送〕
- など。
- 27) 前掲『松下電器五十年の略史』、p.6.、前掲『私の行き方考え方』PHP文庫、p.16.
- 28) 前掲『私の行き方考え方』PHP文庫、p.16.
- 29) 江口克彦氏(PHP研究所副社長)によれば、あるとき幸之助氏から、自分は小学校を4年の途中でやめたが、2年生のときに1年間体をこわして休んでいるので、学校へ行ったのは、実際は2年半だけだったということ聞いたという(江口克彦『心はいつもここにある』、1990年、pp.232.-233.)
- 30) 家の光協会「子どもの光」昭和40年(1965)4月号、pp.80-81.
- 31) 前掲『私の行き方考え方』PHP文庫、pp.17-18.
- 32) わたしの先生「産経新聞」昭和50年(1975)3月31日。ほか
- 33) 昭和53年(1978)10月6日・朝日カルチャーセンター創設記念講座『松下幸之助発言集』第10巻、p.272.、前掲『松下政経塾塾長講話録』、p.58.、昭和36年(1961)3月14日・機械記者クラブ懇談会『松下幸之助発言集』第14巻、p.94.、昭和36年(1961)3月14日・機械記者クラブ懇談会『松下幸之助発言集』第20巻、p.184.、昭和37年(1962)6月2日放映『松下幸之助発言集』第17巻、p.76.、NHKラジオ放送 昭和37年7月14日『松下幸之助発言集』第8巻、p.275.、石垣純二氏との対談「毎日ライフ」昭和45年2月号『松下幸之助発言集』第14巻、p.59.、昭和33年(1958)10月28日・新政経大会での講演、昭和36年5月4日・NHK放送〕

- 言集』第20巻、pp.183-184. ほか。
- 34) 仮谷志良氏(当時・和歌山県知事)との対談「県民の友」昭和54年(1979)1月号『松下幸之助発言集』第16巻、p.124.
- 35) 『物の見方考え方』PHP文庫、1986年、pp.103-104.
- 36) 前掲『私の行き方考え方』PHP文庫、p.15.
- 37) そのときのことを、幸之助氏ははっきり覚えていないというが、とく枝は幸之助氏に、「お母さんはおまえをそばに置いておきたいんやけど、うちは貧乏でそうはいかんのや。おまえ、奉公に行ってくれるか」といったという。子どもごろころにも、家が貧乏であるということがよく分かっていた幸之助氏は、母にそういわれると、「そうやな」と思い、奉公に行くことを承諾したと、その経緯を語っているものもある(前掲『物の見方考え方』PHP文庫、pp.103-104.)
- 38) 和歌山市史編纂委員会『和歌山市史』第3巻、1990年、p.253.
- 39) 昭和36年(1961)3月14日・機械記者クラブ懇談会『松下幸之助発言集』第20巻、p.182.
- 40) 前掲『私の行き方考え方』PHP文庫、pp.27-29.
- 41) 前掲『道は明日に』、p.12.
- 42) 前掲『私の行き方考え方』PHP文庫、p.15.
- 43) 前掲『その心意気やよし』PHP文庫、p.219.
- 44) 前掲「子どもの光」、pp.80-81.

< 主要参考文献 >

- ・ PHP総合研究所研究本部「松下幸之助発言集」編纂室『松下幸之助発言集(全45巻)』、PHP研究所、1991年～1993年
- ・ 創業五十周年記念行事準備委員会『松下電器五十年の略史』、松下電器産業株式会社、1968年
- ・ 『社史資料』No.1～No.15、松下電器産業株式会社、1961年～1966年
- ・ 南海電気鉄道株式会社『南海電気鉄道百年史』、1985年
- ・ 永田清寿『決断 そのとき松下幸之助は』、講談社、1970年
- ・ 『財界家系図』、人事興信所、1956年
- ・ 秦野南嶽『和佐五千年史』、1966年
- ・ 和歌山市史編纂委員会『和歌山市史』第3巻、和歌山市、1990年 ほか

松下幸之助著

- ・ 『私の行き方考え方』PHP文庫、PHP研究所、1986年
- ・ 『仕事の夢暮しの夢』PHP文庫、PHP研究所、1986年
- ・ 『繁栄のための考え方』PHP文庫、PHP研究所、1986年
- ・ 『物の見方考え方』PHP文庫、PHP研究所、1986年
- ・ 『その心意気やよし』PHP文庫、PHP研究所、1992年
- ・ 『道は明日に』、毎日新聞社、1974年
- ・ 『松下政経塾塾長講話録』、PHP研究所、1981年 ほか